

# 近代日本における職業軍人の精神形成

—大正・昭和初期の陸士・陸幼教育について—

教育社会学研究室 廣 田 照 幸

## Mentality Formation of the Professional Officers in Modern Japan

—On Education in the Military Academy and the Cadet School—

Teruyuki HIROTA

This study examines how educators inculcated the ideological doctrines and how pupils accepted them in the Military Academy (*Rikugun Shikan Gakkō*) and the Cadet School (*Rikugun Yōnen Gakkō*).

We focus on the relation of pupils' aspirations for rising in the world (*rissin-shusse*) to the doctrines, devotion to the Emperor (*hōkō*). Reading some documents, we can see that their aspirations for *rissin-shusse* were not necessarily repressed or cooled out in the process of the ideological inculcation. The devotion to the Emperor legitimated their *rissin-shusse* and both were equated each other in their consciousness.

And referring to professional officers' daily lives in 1920s', it is suggested that such a mental character played an important role in the wartime.

### 目 次

- I 課題設定
- II 陸士陸幼の教育
- III 生徒の意識
- IV 軍人の生活難
- V まとめ

#### I 課題設定

日本の軍部、特に満州事変・日中戦争と軍事的拡大を進めていった時期の軍部に関しては従来主に二つのイメージで語られてきた。一つは軍人勅諭や武士道精神・日本主義等に関する思想史的なアプローチから導出される「天皇制イデオロギー」の信奉者としての軍人像であり、他の一つはエリート研究や軍閥・派閥研究が暗黙に前提とすることが多い立身出世主義者としての軍人像である。

しかし、思想的な側面を扱った前者のアプローチでは、規範としての「軍人精神」に重点が置かれることで、表面に現われない個々の軍人の欲求の次元が見落され、歴史の中でのイデオロギーの役割が過大評価される危険性がある。一方、行動や移動の量を分析する後者のアプローチでは「天皇制イデオロギー」が軍人の意識において占める位置が不明確になり、それが果たした機能を無視

しがちである。

また、個人の思想形成に関する研究や派閥研究はほとんどが青年将校運動の担い手やトップエリート将校を対象としている。そこから、軍紀の紊乱・軍紀の退廃をもたらしたのは「少数の政治軍人」であり、「九九%、否もって多数の将校は、こういう争い（派閥争い——廣田）とは、縁もゆかりもなく、戦場に、満州に、また内地衛戍地に、国家のために、ひたすらその使命に尽瘁した<sup>1)</sup>」といった見解も出てくる。しかし、軍事的拡大を支持する軍部内の暗黙の空気、昭和10年代に社会のあらゆる部分で見られるようになった軍人の発言権の増大等を考えるならば「大部分の職務に忠実な軍人」が積極的に時代にコミットしていったという側面の検討が重要であることは明らかである。

藤原彰は地主や軍人を主要なリクルート源とする将校という社会集団を「半封建的 地主制——天皇制 国家秩序」の利害系列に位置づけ<sup>2)</sup>、軍事的拡大を支配者層の体制的矛盾の彌縫と見なす<sup>3)</sup>。また岡部牧夫は「俸給生活者であるかぎりにはたんなる職能集団だが、国家による身分保障の他、少なくとも上級者は職務に精励することによって位階勲章や爵位を授けられ、貴族院・枢密議員に列せられ、職能と身分とが直結し<sup>4)</sup>」た集団として軍人を把握する。しかし、こうした観点に立つ限り、世代

的地位的な下位集団の特徴や、全体的構造と具体的行為をつなぐイデオロギーやエートスの次元は見失われてしまう。

こうした関心から、本稿は“天皇制イデオロギー”と“立身出世アスピレーション”の二つの関係を中心に据えて大正・昭和初期の陸軍士官学校・陸軍幼年学校の教育を検討し、職業軍人の精神構造が実際どのように形成されたか、それがどういう意味を持っていたかを考察する。教育する側の論理と教育を受ける側の意識の両側面から精神形成について述べ、次に個々の将校をとりまく社会的状況に触れて、近代化を推進してきたエートスたる立身出世の欲求が“ファシズム”期の軍人を突き動かす基本的衝動となったのではないかという仮説を提示する。

## II 陸士・陸幼の教育

### A 目的・カリキュラム

陸幼と陸士は、行事のいくつかや学科の内容・程度を別にすれば、日常の起居や学校組織・生徒文化はほとんど同じであった。昭和初期の教育綱領を見ると陸士・陸幼同一で<sup>5)</sup>、

- (1) 尊皇愛国ノ心情ヲ養成スルコト
- (2) 軍人タルノ志操ヲ養成スルコト
- (3) 健全ナル身体ヲ養成スルコト
- (4) 文化ニ資スル智識ヲ養成スルコト

の四項目が掲げられている。具体的な一日の生活は午前中学科、午後は訓育の時間にあてられ、夜は自習時間があって、全員寮生活をする。生徒はいくつかの班（陸幼は訓育班・陸士は語学班）に分かれ、生徒監・区隊長の訓育の下に置かれている。また、上級生が指導生徒として下級生と起居を共にし、模範を示す。訓育はそうした生徒監や上級生との接触や講演や行事を通して、あるいは国史・倫理の学科を通して行なわれたほか、同期生の会など生徒相互の“切磋琢磨”によって、生徒自身が“良き軍人”になるべく努力していた。

講演は例えば大正末の陸士本科では“国民道德批判”（大島正徳）“乃木将軍に就て”“明治天皇御聖徳に就て”（石黒忠憲）“哲学上より見たる国体観念”（井上哲次郎）といった題・講師でなされており<sup>6)</sup>、“天皇制イデオロギー”の教え込みを通した軍人精神の涵養がその目的であったことがうかがえよう。

陸士・陸幼の教科書やカリキュラムに関してはいくつかの研究がなされてきたが<sup>7)</sup>、ここでは最も規範的性格の強い倫理の教科について若干触れる。

木下秀明は陸幼の倫理内容を中学校の修身と比較して、(1)中学校の修身の内容が陸幼では教授部の倫理と訓育部の訓誨学科に区分されている、(2)陸幼の倫理の徳目が、個人→家→社会→国家・天皇→軍人という順で展開している、(3)大正デモクラシーへの対応が迅速かつ柔軟であった、という三点を挙げている<sup>8)</sup>。特に重要なのは(2)の点である。倫理の授業は教科書を使用していなかったが、大正11年に定められた「陸軍幼年学校倫理教授綱要」<sup>9)</sup>によれば、入学直後“本校生徒ノ本領及心得”——すなわち将校生徒としての名誉と責任の自覚から始まり、“立志”“孝悌”といった個人や家に関する徳目が並べられている。次いで中後期には“進取”“快活”などの個人的徳目と並んで“自治”“遵法”“公德”といった団体生活や社会のルールに関する徳目が教えられ、同時に天長節や紀元節にはそれらの祝日に関する教授がなされる。第二学年になると“剛気”“志気”“犠牲”“報恩”といった、特に軍人として必要な諸徳目が教えられ、また“読書ニ関スル注意”“社会ニ対スル心得”といった思想問題への配慮がなされる。等三学年では“国体”“忠節”“報国”“節操”“名誉”など国や天皇を中心に据えた価値軸の中に軍人としての諸徳目が位置づけられることになる。

同様に陸士予科の倫理教授細目においても<sup>10)</sup>“国民道德”7回、“外来思潮”1回などのあと“自覚”“祖先ニ対スル道”“親ニ対スル道”“兄弟ニ対スル道”といった項目が掲げられ、その後“職業ト道德”“長上ニ対スル心得”“部下ニ対スル心得”と軍人としての心得が講ぜられることになっていた。

具体的な内容は手簿等の分析等が必要であるが、家や家族道德の重視、その延長上に国や天皇を論理づけていたことが想像できよう。

### B 訓話の論理

本節では陸士の中隊長である北原一視歩兵大尉の『己れとは』(大正10年・陸軍士官学校研究会発行)と題する本を検討する。“本書は余が生徒に訓話せし教案の一部を整理せるものなり”と自序で書いてあるとおり、制度改正直前の陸士において北原自身が中隊訓話として述べたものをまとめたものである。

北原は、所謂“思想問題”や“科学物質万能主義”や“利己主義”の風潮は“自己”なるものの観察が間違えているからであり、そのために、自分は“己れとは”について考察し訓話したという。国体・国民道德・歴史等に関しても訓話をしたが、“主要論点を錯雑ならしむる”し、“かくの如きは、他に良参考書あること故”省略され

ている。

このように、この本は(1)大正デモクラシー、個人主義的風潮への対応として、自己探究の論理の上に自発的な“軍人精神”の涵養を目指すものであり、(2)国体等の理論を展開したものでなく、軍人としての自己意識の形成に問題を限定して論じている点に特色がある。それは大正中期における若手将校の一つの自己意識を示していると同時に、陸士における訓育内容の具体的な一つの例でもある<sup>11)</sup>。

北原の論理を追ってみよう。まず“家族より、離れたる『我』を、見出すこと能はず。又『我』を離れて、家族もなし”“家族と我とは二にして一、又一にして、二なるもの”“家族と、我との間には、一体普遍の生命があるのだ”と、過去から未来への家族の時間的な連続体の中に“自己”を位置づけることで“自己”は家族なしには存在しえない“家族我”であるとされる(同書第2章)。

次いでその比喩的拡大によって民族の連続体の中に位置づけられて“自我”は“国家我”である、と述べられる。

甲「僕は考へたよ『生』とは『生命なり』、——即ち生命を、親から貰った、と丈けしか考へないのは抑未だ修養が致らぬのだ。——『国家我』という見地からして、——『自我』の内容をなせる、此の生命は、実に、単なる自分の肉体にのみ、単独的に、存在して居るものでない。一体普遍なる、大和民族の、大生命と共通往来して居るものだ。」(22頁)

そして“(我々は)生まれるとから、日本人として、生命を貰ったのだ。そこで、日本人といふものは只だ漠然と、群がり集まって居るのではない。日本人即ち、皇室を中心として、家族的組織の団体である。即ち国より、生命を貰ったのである。”(23頁、傍点原文)と、容易に国家・皇室と結びつけられる。

すなわち北原の論は、家族→民族→社会組織(国体)という自我の拡大を、一方で家族と同様の国体の連続性に、他方で国家の家族主義的形態によって正当づけ、“『国家我』を離れて『自我』なく、又『自我』を離れて『国家我』もない”(26頁)と述べるのである。

こうして自我が国家我とされることで、個人愛は家族愛を経て国家愛に拡大せられるし(第6章)、家族・社会・国家との一体意識によって“一種の熱情”として“誠”の感情が湧いてくる、とされる(第7章)。さらに時代を反映して権利義務や自由・平等についての解釈がなされる。“団体と一体意識となって其幸福、其発達に努力するのが真の道徳的自由である”(110頁)り、人格の平等

は“人格価値の多寡”による差別と両立する。また、“必ず行動せねばならぬとする、自己内心の感じ”(=“本務”)を実行しようとするのが“道徳意志”であり、その意志の自由を認めたものが人格の道徳的権利である。そこでは“権利即ち義務である”(120頁)る。

かくて、忠節を尽すことは日本人の本務であり、“忠君報国は即ち吾人の生命である”(131頁)るから自己の自然な感情として忠誠心が湧いてくるとされる。

自己→家族→国家という論理の展開は先に見た倫理のカリキュラムと類似しているが、ここで注目すべきは、その同じ論理平面上において“国家我”としての自己が自然な自発性から献身努力する限り、個人の立身出世は肯定されていることである。

……自己の発達は即ち国家の発達であるのだ。これと反対に、吾人は一寸病んでもだ、——それは指先丈けの問題ではなく、吾人全体がなんとなく気持が悪いのだ。……(中略)……国家と国民に於けるもその通りだ。国民が、小部分でも腐敗し始めれば、夫れは国家の恨事であるのだ。国家の大生命を、自我の生命として、国家と、一体意識になって居るならば、夫れ等の事はすぐ解る。自己の立身、出世を考へる。——単なる自我の為しか、考へなければ、それは、私利、私欲である。然しながら、立身、出世は何の為にするのか。それ丈け国家に貢献するのである。自分をよく発展せしむる事は、即ち、国家の発展となるのだ。とかく考へて奮励すれば立派なものだ。……そうなくてはならぬ。(48~49頁)

北原大尉の訓話では、自我→国家我と逆向きの論理をたどって、国家への貢献として立身出世は肯定・称揚されており、教育する側の論理として、生徒の立身出世の欲求を否定したり冷却したりして献身のイデオロギーに取り換えるものではなかったことがわかるであろう。

### III 生徒の意識

#### A 作文に見られる生徒の意識

次に生徒の側の意識について見てゆこう。ここでは陸士予科が毎年発行した『生徒文集』<sup>12)</sup>をとりあげる。この文集は、普段の作文の時間などに生徒が書いた作文の中から優秀なものを選び出して集録したもので、“本書ハ之レヲ本校生徒ニ頒チテ学習ニ資セシム”とあるように生徒に頒布して作文の参考にさせたものである。収録された作文は毎年度約30編ぐらいずつである。

生徒の作文が忠君愛国精神に溢れているのは、教官に提出されたものの中から学校側が傑作として選び出した作文である以上当然のことであろう。しかし注意深く読めば、軍紀について論じ、国民精神の悪化を憂い、皇室行事への参加の感激を語る時と、自分の生き方、生命や夢を論ずる時とは微妙なずれがあることに気づく。

昭和2年卒業生の作文には「敬神崇祖」と題したものが4篇収録されているがそれらは次のようである。

ア. 一家ノ祖先ヲ崇拜スルモノハ、體テ其ノ大皇家タル皇室ノ御先祖即チ皇祖皇宗ヲ崇敬シ奉リ、入りテハ則チ一家ノ為メ、出デテハ則チ国家ノ為メ其本文ヲ尽シ、自己並ビニ祖先ノ名誉ヲ揚グル為メニハ、身命モ惜マザルニ至ル。……(中略)……一人身ヲ誤リ、家ヲ誤ラバ、一國衰退ニ赴キ、一人身ヲ立テ家ヲ興サバ、一國隆盛ニ赴ク。(S. T)

イ. 我等ノ祖先ハ、其ノ父祖ノ死スルヤ、之ヲ神トシテ祀レリ。ソハ死者ノ靈ヲ畏レシガ故ニアラズ。父祖ヲ敬愛シ、コレヲ慕フノ誠ヨリ出ヅ。カクシテ最モ小サク近キ血族団体タル一家ハ此ノ精神的血液ニヨリテ益々繁榮シ、延イテハ郷土ニ於ケル氏神、産土神ノ崇敬トナリテ一村榮エ、更ニ国家的敬神崇祖トナリテ鞏固ナル精神的結合ヲ保チ、以テ無窮ノ皇國ヲシテ益々發展セシメ、金甌無欠ノ國体ヲシテ愈々光輝アラシメタリ。……(中略)……吾人ハ敬神崇祖ニヨリテ益々人格ノ完成ニ努メ、神ニ近ヅキ、以テ天職ヲ尽シ、報國ノ誠ヲ効サザルベカラズ。是レ吾人ノ永遠ニ生クル道ナリ。(H. S)

ウ. 父母ヲ敬愛シ、而シテソノ進ムベキ路ニ猛進スルハ、即チ孝行ニシテ、即チ崇祖ナリト余ハ信ズ。理窟モナク、理由モナシ。只父母ヲ敬愛シ、自己ノ本文ヲ尽セバ足ル。コノ点ニ於テ、余ハ崇祖ノ相当ニ能ク行ヒツツアルモノナリト思惟ス。(S. G)

エ. 特ニ余等ノ如ク、将来國軍ノ楨幹トナリ、國家ヲ担ヒテ立ツベキ壯丁ノ訓練ニ当ルモノニ於テハ、鞏固ナル國軍ヲ作ルタメ、善良ナル國民ヲ育成センガタメ、益々敬神崇祖ノ念ヲ涵養セザルベカラズ。(M. I)

四者四様に「敬神崇祖」の題で想念を巡らせているが、こうして四つ並べてみると、一般的な将校生徒の意識の全体像が浮かんでくるようである。

アの作文では、家意識が“大皇家”たる天皇と結びつけられて、“自分のため=家のため”と“国家のため”が一致している。“入りテハ則チ一家ノ為メ、出デテハ則チ国家ノ為メ”に本分を尽くし、生命を惜しまない決意

は“自己並ニ祖先ノ名誉”のためである。

イの作文では、日本人の宗教的特性である神人合一観に基いて、人格の完成を神に近づくことと見なしている。そして“人格の完成”と“報国”によって永遠の生命が得られると考える。“人間は必ず死ぬ”という現実の中で、何らかの形で自己の永遠性を得たいという欲求は普遍的に見られるものだが<sup>13)</sup>、特に軍人という職業が死に直面したものであるだけに将校生徒の作文にはたくさん出てくる。例えば、“我が明治維新ノ際ニハ 幾千ノ忠臣義士活躍シタリ。然レドモ維新史上一人ノ西郷南州無クンバ如何。米國五百年ノ歴史ハ忘却ストモ、唯一人、ワシントンハ忘ルベカラズ。蓋シ英雄ノ生命ハ不朽ニシテ、英雄ノ人格、英雄ノ偉業ハ、永遠ニ吾人ノ脳裡ニ生キ、吾人ニ希望ヲ与ヘ、吾人ヲ激励鞭達シテ止マザレバナリ”(T. A「英雄」昭和7年卒)とか、“吉田松陰ハ三十二ニシテ死セリト雖モ、日本人ノ存スル限り松陰ノ生命ハ存スルナリ。”(M. T「長命術」昭和5年卒)といった具合に、英雄になること、不朽の名声を得ること、不死性=自己の永遠性にたどりつこうとする考え方がしばしば見られるのである。神人合一観に立つ限り、死後得られる、あるいは死と引きかえを得られる名声は死後も享受しうる社会的資源であり、その意味では世俗的な欲望と見なすことができよう。

父母への孝行が崇祖であるというウでの考え方はあまり一般的ではないが、自己の本分を果たすこと、すなわち将校生徒として努力することが“孝行”ととらえられていることは広く見受けられる考え方である。

エの作文では、将校という職業の自覚が敬神崇祖と結びついている。彼は“神仏ハ是レ我等ノ祖先タリ、同胞タルモノナリ”“家族制度ノ我が國ニ於テハ、祖先ヲ崇拜スルコトハ、自然ノ衷情ヨリ生ズル真心ナリ”と述べ、敬神崇祖は我が國に固有で自然なものだと考える。それゆえ“敬神崇祖ハ余ノ唯一ノ修養ナリ”と将校として必要な精神修養と考えている。これも将校生徒の神社参拝などの際によく見られる考え方であるが、家族→国・天皇という拡大で軍人精神の涵養を目指す訓育者の意向に沿ったものといえよう。

これらを合わせてみると、(1)個人的達成の野心や家族の期待に応えることといったものが“報国”と同値化されており、(2)その個人的達成は必ずしも階級の上昇に限られたものではなく、英雄になること不朽の名声が得られることまでを含んでおり、(3)訓育者の意図に沿った形で自己→家→国・天皇という論理を内面化している、といった姿が浮かんでくる。

もう少し作文を見てゆくことにしよう。“予ノ本校卒

業ヲ母上イタク悦ビ給フ。是予が最大ノ悦ビナリ。冀クハ益々奮励興起、陛下股肱ノ名譽ヲ担ウテ奉公ノ実ヲ挙ゲ以テ家名ヲ挽回セン”(K. H「我が生立」昭和17年卒)というふうに“奉公”を通じて家名の回復をはかろうと考えるものもいた。また偉くなるという望みを持ち続けている者もいた。

我ハ、朝早くカラ、半バ肉体的ニ相当ノ労働ヲシタ。其ノ為ニ当時ハ周囲ノ労働者ヲ見テ、我モスクナルノダト信ジテキタ。不図シタ幸福カラ、我ハ中学ニ入ルコトガ出来タ。ソコデ又理想が変ツタ、「俺ハ偉イ人ニナラウ」。斯ウ考ヘタ。斯クテ段々年ガ経ツニ従ッテ、一層我ヲ考ヘタ。サウシテ、今ヤ其ノ目的ノ第一段階ニ足ヲカケテキル。……(中略)……偉人ト雖モ凡人ヲ磨イタモノデアル以上我モ亦イツマデ凡人タルニ満足ハシテキナイ。心ノ中ニハ燃ユルガ如キ大望ガ潜ンデキル。ダガ、マダ本当ニ判然タル我ハ捉ヘルコトガ出来ナイ。(K. U「我」昭和7年卒)

## B ある生徒の日記から

本節では、大正13年4月に東京陸軍幼年学校へ入校し、50名中1番の成績で卒業した杉坂共之の日記を検討する。彼の日記は生徒監などの検閲を経ない全くプライベートな日記であり、生徒の意識を検討する上で貴重な史料である。

彼の経歴について触れておこう。彼は明治42年4月に生まれ、府立四中から東京陸幼に入り、昭和6年陸士本科卒業後、近衛歩兵第一連隊へ少尉として任官、9年中尉、12年大尉、16年8月少佐に進級。その間陸士本科生徒隊付、近歩第一連隊中隊長、教育総監部付、ついで歩兵第三十四連隊中隊長を歴任し、15支那派遣軍参謀部付となる。16年12月、太平洋戦争開戦直前、命令書伝達のため飛行機で香港に向かう途中で戦死した。死後中佐に進級した<sup>14)</sup>。

陸士時代の同期生による人物評によれば、彼は“主流派”に分類されており<sup>15)</sup>、また幼年学校1年の終りには生徒監に次のように評されており、正義感がつよく責任感があり成績もよい“模範的な”生徒だったようだ。

非常に剛勇な精神なれども少しく剛情なり。自分とてもさう思はずや。物をなげっぱなしのくせあり。…少し気に入らざることあり。活動に度々行くからなり。——同期生間には人望があり。学業は非常に好成绩なり。然れども語学及び作文悪し、然れどもそれも他生に較ぶれば普通なり。益々励み第二学年になりて

も現今と変らぬ様に。いたづらをしてはならんぞ。(大正14年、3月15日)(誤字等は原文のまま以下同じ)

紙数の制約上、ここでは日記からいくつかの論点に関する部分のみを掲げる。

### ア.〈孝行=出世〉

自分は父母の喜悦を見ては何事も辞せられないであらう。ああ其の海山の如き御恩を思ったならたとへ水火の中も辞せぬであらう。それには出世が第一であらう。たとへ身は粉になるとも前途には赫々たる光明がある。併し光明は遠い。努力少しもたゆむな。(大正14年2月22日)

### イ.〈校庭の草刈の際に〉

芝生にて談話をなせり。三上に予の人生観の一端を語り。予等の生存は即ち無意義なり。即ち地球は一個の塵箱にすぎず、人間はこれにわけけるうじにことならず。即ち地球の滅亡人類の死滅は必ずあり得べき事にして然る時は総ての名誉も恥辱も広大なる地球、世界と共に永遠に没し去らるるなり。かかるはかなき無意味なる我等は何故にかしし(汝々——廣田)として働けるや。即ちただ先祖に見ならひ大勢におされ習慣的に名誉を重ずると共に一身及び一族の安楽をはからんが為ならずや、且我等の両親は我等の出生すると共にいなその以前より非常の心配にて育てられしかも其尊き生命をも投げられて育くめるならずや。然れば我等は即ちその親に対し全力をつくし孝善をつくさざるべからず。即ち立身出世を望むは其第一なり、又主君の恩を報ぜんこと其第二なり。而して老ひ即ち我最愛する子孫の健全なるを見て浮世の義務をはたせる満足なる心のうちに一場の幕をとづるなり。これによる我等の目的はひたすら立身出世によりて遂げられかつ四方の人々を愛して満足に面白く、世を過すが第一等なる経世術なり。つとめよ、つとめよ、楽は苦のたね、苦は楽のたね。(大正14年9月12日)

### ウ.〈作文を返されて〉

作文では先日書いた「寒夜の自習」「起床より始業迄」をかへされた。予の書いた「寒夜の自習」が読まれた。悪い気持ちではない。しかし余り大きなことを書いて気はづかしい様な感もする。併し当然の事を書いた迄だ。益々励んであの作文に恥じない様な人物にならなければならぬ。腹の底に沸く、脳に躍る、この赤い血潮の活動を外面に表らして蓋世の英雄となることを期しなければならぬ。ただ期しただけでは何もかかはらぬ。ただ実行あるのみだ。「棒ほど願って針

ほどかなふ」の言葉を忘れてはならぬ。これは誠が足りないからだ。若いのだ。男だ。大和男子だ。軍人だ。この心を忘れてはならない。(昭和2年2月21日)

エ.〈閲兵式陪観〉

やがて御閲兵は始まりぬ。たてがみ振ひて天空高くいななく春駒ひづめの音も高く我等が宮殿下は英姿さっそうとして過ぎ給ふ。諸兵のかざす刀の影日に照り映えて光り輝く。おお何たる男性的快味ぞ。身若輩にして摂政宮殿下に咫尺し奉り得るの栄何物にかたとへん。(大正15年1月3日)

オ.〈大正天皇の病氣・死〉

聖上御病篤し。大だ憂慮の外なきなり。(大正15年12月17日)

風寒むけれど日輝きなれば建物によりて日向ぼっこをなせり、暫くして内に入りて読書せり。雲次第に繁く暗雲低く朔風荒び天聖上の御病をなげくか。……夕食後新聞を読みに行けり。聖上陛下の御病上遂一紙面を埋み言々悲痛、胸をつく。昨夜十時、御熱三十八度五分、御脈百二十八、御呼吸三十二、御容体刻々御危機に瀕せられ、世を挙げて憂ひの雲に閉さる。嗚呼何たる御不幸ぞ。月さやかなれども憂の雲深し。(同18日)

聖上陛下御小康を得させ給ふ。以て少こしく愁眉をひらく。(同20日)

聖上陛下には次第に御良好にわたらせ給ふよし拝聞し奉り欣喜の他なし。……一日も早く再び天日の光がやき増さんことを祈り奉る。(同23日)

陛下御重体。御呼吸六〇。心痛の至り。(同24日)

聖上陛下本日午前一時二十五分崩御との悲報に撃破られぬ。室内悲嘆の声湧く。時に午前四時夜の帳未だ深くとぎせり。直に床を離れ洗顔、口を清め運動場に出で葉山の方に向ひて遙拝しぬ。頭を垂れしまま上げ得ず。涙潜々としてほほを流れぬ。(同25日)

まず気づくのは、立身出世の希求が父母への孝行として考えられていること(ア, イ)である。日々の努力や修養は立身出世を通じた孝行のためなのであり、今まで育ててもらったことに対する恩がえしの強い欲求に源を発していることがわかる。彼は次のような歌を作っている。“父母に何をもちてかむくひざらましきもふとく智勇すぐれし壯士をみやげにせんと我は励めり”(大正14年9月7日)。

第二に、皇室への崇敬心は単なるタテマエではなく彼のホンネであること(エ, オ)である。天皇は立身出世の“道具”として考えられていたのではないし、集団内での相互監視によって崇敬するふりをする対象でもなか

ったことを大正天皇の病氣に関する彼の記述は物語っている。しかも、3年生当時の彼の皇室に対する崇敬心は、1・2年の時のそれに比べ格段に深まっている。このことはア(2年生の9月)で脈絡もなく“主君の恩を報ぜんこと”が出てくるのに対し、3年次の日記では、より具体的に日記に登場する頻度も高まっていることからわかるが、どういう契機でどういう省察を経て内的深化を遂げたのかは日記からは読み取ることができない。

第三に、ここでの中心課題であるが、報国献身の教育は彼の立身出世アスピレーションを冷却するものではな

表1 T.Sの日記の欄外書きつけ

〔1年生〕	
4. 11	革新
〔2年生〕	
4. 6	口は過の門
4. 24	再生, 努力, 克己
9. 18	永久
9. 20	議論を止めよ。温順
1. 2	心は寛大に。業は熱心に
1. 18	努力
〔3年生〕	
4. 10	誠心
4. 15	柔よく剛を制す
4. 18	士魂
5. 14	油断大敵
7. 28	平和は軍の充じつにあり。徒らに憤慨すな。深く考えよ
8. 17	克己
8. 18	確固たる信念
8. 19	人格の向上
9. 9	男, 奮闘を誓ふ
9. 13	俺は今日以後生れかかはる, 今迄の俺ではない。乃木將軍の魂を受けた俺でなければならぬ
9. 21	武士ちゃ, 男ちゃ, 意気ちゃ
9. 22	正義, 修養
9. 23	情愛, 童心
9. 27	赤子
10. 1	努力は最善の方法
10. 2	不屈, 不撓
10. 3	報国丹心, 捨身行道
11. 6	精神え力
11. 7	猛虎
11. 13	正, 勇, 静, 活, 力
11. 17	勇気, 正義, 純真
12. 24	実行せよ
1. 31	努力せよ, 真面目であれ
2. 20	社交の真髓は敬愛と誠実にあり
3. 17	油断大敵

詩歌・事務的な内容の書きつけ等は省略してある

いし、両者は矛盾していないということである。

入校後しばらくして斎藤海軍中將の講演があった際、杉坂は“我等は益々学をばげみ以て一世の大英雄とならん事を期す”(大正13年5月24日)と記している。そして、“最後の勝利”をもたらすのは“努力”であり(同11月9日)、そうした努力の目標を学年トップで卒業することに置いた(同14年2月1日)。その努力は孝行のためであり(——ア)2年の9月に友人に“孝行の第一が立身出世である”と述べて(——イ)以後彼の立身出世に対する考え方が修正されたような記述は見られず、卒業直前でも(——ウ)“蓋世の英雄”は彼の目標であり続けた。と同時に3年になった頃から皇室や国への献身、武士道精神に関する記述が増加してくる(表1)。

彼を努力に駆り立てたのは個人的な欲求充足(孝行のための立身出世・英雄志向)であったがその努力の方向は、利己的な欲望を捨て皇室や集団に自発的に奉仕する人格を形成することであった。他者への奉仕は軍人として必要な資質である。その自発的な献身を通じて彼は自分自身の目標に近づいていくのである。

### C 考察

門脇厚司は“日本人の出世欲は、近代化を支えた心理的起動力(Antrieb)であった”と述べているが<sup>16)</sup>、確かに社会的上昇を目指す民衆の欲求は、現実的・観念的に体制内の階梯の上昇へと水路づけられることで近代化を推進する主要なエートスであり続けた。

その際、日本においては立身出世の欲求とそれを否定する規範とが併存していた。竹内洋はその規範を“身分的上下構造”に由来するものととらえ、欲求と規範の矛盾の止揚について次のように分析している。

立身出世や達成動機をめぐる「規範」と「欲求」の背馳は、両方からの接近圧力が生じて独自の展開をなしていく。立身出世でいえば、個人主義的な立身出世ではなく、国家や所属集団のための立身出世というかたちで正当化され、達成動機でいえば、個人主義的達成動機ではなく、国家や所属集団の貢献価値に導かれた達成動機というかたちで正当化される<sup>17)</sup>。

“無私の献身”を最も強調する陸士・陸幼教育においてもこの点は同じであった。家族への献身(孝行)——国への献身(奉公)と同値化されることで立身出世のアスピレーションは生徒の努力と勤勉の源泉であり続けた。また前章で見たように教育する側でも所属集団の同心円的拡大上に家族に擬制された国家・国体を位置づけること

により、生徒の自発的努力を引き出す論理をとっていた。

このことはたんに大正・昭和初期だけでなくすでに明治末頃からしばしば見ることができる。一例を挙げれば明治42年に出された将校教育の研究書は次のように述べている。“今後ノ軍隊ハ一ニ殆ント将校ノ技能ニ俟ツアルヲ知ラハ豈寸時モ研鑽ヲ苟ニスヘケンヤ是レ実ニ献身的奉公ノ義務アル吾人将校ノ責任ニシテ當ニ君主国家ノ為メノミナラス一身上ノ榮譽ノ基ク所モ亦茲ニ存スレハナリ”<sup>18)</sup> 生徒の意識も自伝やエピソードを見る限り同様であり、少なくとも明治末から昭和初期にかけて献身道徳と立身出世の私的欲求の関係に根本的な変化はなかったと考えられる。あるいは次のように言えるかもしれない。〈上からの規範〉は立身出世を否定する方向に進んだ。それにも関わらず、教育的関係のレベルでは立身出世の欲求が依然として動員されており、それゆえ個人レベルでは(たとえ〈上からの規範〉によって意識下に抑圧されたとしても)立身出世の欲求は存続しつづけたと。

ここで重要なのは、規範たる“公への献身”の内容が無規定であり、無限に恣意的な規定を許すことである。神島二郎は、明治維新の際献身対象が個々の封建君主から天皇へと集中一元化されることによって、献身対象がパーソナルなものでなくなり(=概念化)個人の恣意的欲望が潜入することになったと述べる。すなわち“対象自身が献身内容を規定する(命令!)ことはないから、献身内容について自由な——というよりも勝手な解釈を施す余地が出てくる”のであり、献身対象の概念化→個人の欲望の潜入→献身内容の恣意的解釈による欲望の合理化→献身行為による欲望の充足、という“欲望自然主義”が生まれてくるのである<sup>19)</sup>。

しかも“天皇は道徳的価値の実体でありながら、第一義的に絶対的権力者でないことからして、倫理的意志の具体的命令を行えない相対的絶対者となり、したがって臣民一般はすべて、解釈操作によって自らの恣意を絶対化して、これ又相対的絶対者となる。ここでは、絶対者の相対化は相対的絶対者の普遍化である。”<sup>20)</sup> というふうに、欲望自然主義は他者に満する無制限な権力の行使をも可能にする。

規範としての“軍人精神”が要求する“熱烈なる尊皇愛国の念内に燃え、私利私欲の観念なきこと”<sup>21)</sup>とは異なり、意識や発言では“滅私奉公”，行動を見ると出世出義の打算という、軍人に見られる二重性は、立身出世=孝行=奉公の同値化による欲望自然主義の発現ではなかったか<sup>22)</sup>。次章ではこうした精神構造のもとで軍人が昭和初期にどういう生活状況におかれていたかを検討し、軍事的拡大と立身出世市場の再活性化の関連について述べよう。

## IV 軍人の生活難

大正14年にある主計将校が各国の武官の給与について研究報告をしている(表2)<sup>23)</sup>。大佐の給与を100とすると少尉の給与は日本では18でしかなく、他の欧米の軍隊に比べて上に厚く下に薄い俸給体系となっている。かくてこの主計将校は、日本の場合“要するに軍人は中佐以上になると地位は無論のこと収入から言っても随分宜しくありまして生活にも多少余裕が出来ますから、誰しも勉強して偉くならねば駄目だと云ふ暗示とも見られるのであります”と述べている。さらに定限年齢を比べてみると(表3)中少尉が45歳、大尉が48歳、少佐50歳、中佐53歳、大佐55歳という日本は、ドイツの変則を別にすれば、最も若くして軍を去らねばならない制度になっていたことがわかる。日本の軍隊制度は俸給体系においても定年規定においても、昇進・昇級を動機づける構造になっていたのである。

しかも、日清戦争後に大量採用した世代が次第に定限年齢に近づき、昇進の遅滞を深刻化させていた。軍縮による整理・中等学校への現役将校配属制度等で合計約

表2 武官の給与(大佐の年俸を100とする)

大正14年7月

階級	区分	日本	英国	米国	仏国	伊国
大佐	最高	100	100	100	100	100
	最低					
中佐	最高	78	94	90	86	94
	最低		92	76		68
少佐	最高	57	66	84	80	87
	最低		58	69	76	59
大尉	最高	46	51	70	67	78
	最低	35	50	56	59	46
中尉	最高	26	38	58	53	69
	最低	22	28	46	47	36
少尉	最高	18	28	47	42	59
	最低		24	40	40	33

佐伯二等主計「武官の給与に関する私見」『偕行社記事』609号

6000人を削減したものの、昇進の停滞は続いた(表4)。

すでに大正10年に、“将校となるも極少数の優秀者に

表3 各国陸軍現役定限年齢一覧表

	少・中尉	大尉	少佐	中佐	大佐	少将	中将	大将
日本	45	48	50	53	55	55	62	65
フランス	52	53	56	58	59	60	62	70
イタリア	48	50	53	56	58	62	65	—
イギリス	48		50	55	57	62	67	—
アメリカ				64				
ドイツ								

特に定限年齢を定めず、少尉任官後25年間は其の地位を保証す

外国は『偕行社記事』620号(大正15年5月)による。(大正15年3月調)

日本は『陸軍人事剖判』14頁による。(昭和5年2月現在)

表4 陸軍士官人数比(%)

	明治26年	明治33年	明治43年	大正4年	大正9年	大正14年
将官及び相当官	1.0	1.3	1.2	1.1	1.4	1.5
大佐	1.5	1.7	2.0	1.9	2.5	3.4
中佐	2.1	2.1	3.3	3.3	4.7	5.9
少佐	8.9	8.6	8.7	7.5	10.7	13.6
大尉	30.7	31.3	27.3	26.4	32.1	33.1
中尉	38.4	30.1	43.3	37.0	27.9	29.0
少尉	18.4	25.0	14.3	22.7	20.6	13.5
人数計(人)	3,389	7,070	12,752	14,171	15,742	13,814

『日本帝国統計年鑑』より算出



非ざる限り大尉或は少佐にて誠首せらるるを以て、爾後生活の安定を失ふに至ると臆測する”ことが将校生徒志願者不振の理由に挙げられているが<sup>24)</sup>、昭和4年頃に至っても“……老少佐の大隊長は停年名簿の中に幾らも発見されるのである。中に最も悲惨なのは士卒の教育に直接当たっている中隊長格の老大尉の群であらねばならぬ。四十歳内外の中隊長はその数の余りの多いのに驚嘆する外はない”<sup>25)</sup>“その四十を過ぎ五十に近き老少佐、老大尉が、終日の演習に疲れ果て、トボトボと兵を引率する可憐の姿を見るもの、決して之を冷視することを許さぬであらう”<sup>26)</sup>といった状況であった。

昭和8年頃の模様を伊藤昇は次のように語っている。

当時は十年以上の先輩が中尉の古参で在勤しておられ、大尉の古参組の如きは進級か待命かと、定期移動毎に官報の到着を首を長くして待っていたことを思うと、第二次大戦の間人事行政の中枢にあった私としては、全く今昔の感に堪えないものがある。当時少佐で進級もせず待命になり或は少佐に進級待命になられた不幸な方を数多く覚えている<sup>27)</sup>。

こうした進級の停滞は不況や将校としてのプライドによる再就職の困難さと相俟って、少佐・中佐あたりで退職する多くの将校の恩給生活を悲惨なものにした。“A少佐は待命となると、其日に馬の背に馬具一式を乗せて、百円なにかしかで売り飛ばした”“一体退職という変動に逢うて、忽ちにも生活の状態を一変するといふことは容易なことではない。学校に行つてゐる子供を退学させて小僧にやるといふほどでもなければ実際困る人があるかも知れぬ”<sup>28)</sup>“上司では充分に研究の上、処置せられてゐるのでせうが、又、一面、受身の下から望むなら、要するに、一日でも永く勤めさせて頂く、是、大部の叫びでないでせうか。……殊に、四十五六の働き盛り、而も社会は、使用に二の足を踏む私生活全盛期、何んとしても、今一層、御研究を煩はして、将校をして、安んじて、専念せしむる様にあらせたい”<sup>29)</sup>といった、退職将校の生活の困窮を訴える投書が『偕行社記事』にしばしば掲載されるようになった。

このように(1)俸給・定年制度の特徴、(2)昇進の遅滞、(3)退職後の生活難、によって、将校の生活および将来の生活の見通しは明るいものではなかった。これらの諸要因は若い世代の将校の陸大受験を目ざす競争を激化させ、また煩悶や転職をもたらした。ある騎兵大尉は“人々心身ヲ鍛練シ各其ノ業ヲ励ミ以テ競争場裡ニ勇往カ行スルハ自ラ成功ノ勞冠ヲ得ル所以ナルト共ニ又正ニ国家ニ

奉仕スル所以ナリ”<sup>30)</sup>と競争を通じた成功=奉仕を強調しているが、こうした考え方である限り陸大に合格した者は“余ハ今幸ニ陸軍大学ヲ了ヘテ奉公ノ道ヲ尽シツツアリ”<sup>31)</sup>と、立身出世=奉公の実現に向けて努力を続けていたが、陸大受験に失敗した者は「万年大尉・千年少佐」と呼ばれる老大尉・少佐と自分の姿を重ね合わせて煩悶せざるをえなかった。退職して大学に入り直したある将校は次のように語っている。

……大尉で陸軍大学校の再審試験に失敗した時位寝覚めの悪い事はあるまい。

一時に前途が暗黒になったような気がする気力がすっかり抜けて何をするにも張合がなくなってしまう。而して自分の能力に関して非常な自信を失ふに至る。而して一時的にせよ一種の精神的死滅に陥る<sup>32)</sup>。

あるいは、“熱血燃ゆるが如き青年が成功の栄光に撞るるは猶夏虫の燈火に赴くが如く、人性の恒常であらう”としながらも「富貴や栄達」は人生の究極の目的ではなく、“国家並びに社会の進展に参献しつつ自我を創造し全我を發揮すること”<sup>33)</sup>——自己実現——を目標とし、軍人としての本務に専心しようとする考え方も現われてくる。他方、少しでもよい評価を得て、一つでも階級を上がりたい、長く勤めたいといった衝動は、検閲や検査の形骸化、無意味な訓練の強制や隊内の事件のもみ消しを生んだ。大正中ごろから露骨な立身出世主義が抬頭し、検閲や検査の際にその場をとりつくろうようなことがしばしば行なわれている、という批判が繰り返し現われてくるが、特に陸大を出ていない将校にとっては、検閲や検査の成績は重大な関心事であり、点数稼ぎにあくせくしなければならなかった<sup>34)</sup>。

## V まとめ

欲望自然主義自体は多様な欲望の潜入が可能だが、前章で述べたような状況の下で満州事変が引き起こされたならば、軍人達には立身出世市場の再活性化の好機として映るのは自然のことだろう<sup>35)</sup>。すなわち、若手将校やエリート将校は功名を挙げ組織を上昇していくことが、老将校は長く勤務でき、うまくゆけば少しでも階級や地位を昇ることができるのである。かくて立身出世の衝動は軍事的拡大の動きに対する軍部内の暗黙の支持を生む。

しかも将校自身が将校の任務の遂行を“国のため”と正当化する限り、自己の行動を“滅私奉公”として意識する。そして将校の威信が高まり、業務上の権限が拡大

し国民の生活と密接に関わるようになればなるほど献身の意識の下に隠された欲望は肥大化し、献身内容の恣意性を強め、その結果無数の“小天皇”が力をふるうことになった。“滅私奉公”は“活私奉公”だったのである。(指導教官 天野郁夫教授)

## 注

- 1) 松下芳男『日本軍閥の興亡(下)』芙蓉書房 1984 243頁。
- 2) 藤原 彰『軍事史』東洋経済新報社 1961 157~159頁。
- 3) 藤原 彰『太平洋戦争史論』青木書店 1982 24~28頁。
- 4) 岡部牧夫「日本フェシズムの社会構造」日本現代史研究会編『日本フェシズム(1)』大月書店 1981 56頁。
- 5) ここでは陸幼と陸士の教育の違いや、陸幼出身者と中学卒業者との違いといった点は扱わない。陸幼は『訓育提要』(1931)。陸士は「陸軍士官学校教育綱領の改正に就て」『偕行社記事』697号(昭和7年10月号)参照。
- 6) 『陸軍士官学校本科生徒課外講演』1924~1926 国会図書館蔵。
- 7) 陸幼の国語教科書の内容分析を行なった福地重孝は日清日露両戦争の輝かしい勝利の面のみを強調した教材が多く、“社会・経済乃至政治に関する教材は極めて少なく、国際的理解に関するものはほとんど皆無”であった、とイデオロギー的偏向を強調している。他方陸士予科の国史の教科書の内容を調べた鈴木健一は、昭和初期まではかなり客観的で公正な歴史叙述がなされていたことを明らかにしている。(福地重孝『軍国日本の形成』春秋社 1959 226~231頁。鈴木健一「陸海軍学校における国史教育」加藤 章他編『講座歴史教育1 歴史教育の歴史』弘文堂 1982。)
- 8) 木下秀明「陸幼の教育」東幼会編『東京陸軍幼年学校史わが武察』1982。
- 9) 『教育総監部第二課歴史』所収。
- 10) 同上。
- 11) なお北原の序文によれば、一方的なお説教にならぬよう、また読み易さを考えて、甲乙両生徒の問答形式で書かれている。
- 12) 偕行社蔵。
- 13) 加藤周一他『日本人の死生観(上)(下)』岩波書店 1977 参照。
- 14) 日本近代史料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』東大出版会 1971 等による。なお本日記は東幼会蔵。
- 15) 『清流 陸士第四十三期生史』1960 165頁。
- 16) 門脇厚司「日本的『立身・出世』の意味変遷」門脇編『現代のエスプリ 立身出世』至文堂 1977 68頁。
- 17) 竹内 洋『日本人の出世観』学文社 1978 90頁。
- 18) 鉄城氏『将校之教育及研究』兵林館 1909 60頁。また、明治末の将校生徒の意識については、例えば山中峯太郎『陸軍叛逆児』小原書房 1954 参照。
- 19) 神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店 1961 185~194頁。
- 20) 藤田省三『天皇制国家の支配原理』未来社 1966 34頁。
- 21) 教育総監部編『武人の徳操(下)』1930 7頁。
- 22) ブレドスタインはアメリカにおける専門職化の弊害として社会に対する奉仕という理想主義と独占的私利私欲が区別できないことを挙げているが(Bledstein, B. J. "The Culture of Professionalism" W. W. Norton & Company, Inc. 1976 p. 92~105)、職業軍人を公的サービスを業務とする専門職と見なすなら、自己の利益と集団の利益の同一視はどの軍隊でも同じであるとも考えうる。しかし、献身対象が国民ではなく天皇とされることによって、非合理的な命令を拒否し進言することが不可能になり、また本来顧客たるべき全国民の総意すら拘束力を持たないことになるから、無制限な権力=恣意の浸透に対する歯止めがないこと、同時に命令(支配)——服従関係が道徳的な上下関係とされ、全人格的な支配を可能にしたということが決定的な相違点である。
- 23) 佐伯二等主計「武官の給与に関する私見」『偕行社記事』609号(大正14年6月号)。
- 24) 「将校生徒志願者の現況並に指導に就て」『偕行社記事』563号(大正10年7月号)。
- 25) 大石隆基『陸軍人事剖判』1930 25頁。
- 26) 同上 24~25頁。
- 27) 伊藤 昇『昭和の戦乱に終始した一将校の老廃までの歩み』1979 23~24頁。
- 28) S少佐「思ひ付のまま」『偕行社記事』539号(大正8年7月号)。
- 29) 一在郷将校「退職時の感想」『偕行社記事』695号(昭和7年7月号)。しかも昭和4年の官吏減俸令、昭和8年の恩給法の改正は退職将校の恩給生活を一層苦しくした。ちなみに尉佐官級の一人当り普通恩給受領額を文官(奏任官)のそれと比べてみると、明治33年、大正4年、昭和5年で文官は301.91円、401.1円、942.6円(年額)となっているのに対し、武官のそれは339.2円、323.8円、797.3円となっている。大正・昭和期になると武官の方が恩給も低く、また表に示したように定年も早かった(『日本帝国統計年鑑』より算出)。
- 30) 浦野清槌騎兵大尉「青年将校ノ体力及気力ノ増進案」『偕行社記事』575号(大正11年7月号)。
- 31) 村田謹吾「恩師某大尉ヲ訪フ」『生徒文集』。
- 32) 半田敏治砲兵大尉「在郷三年の所感」『偕行社記事』634号(昭和2年7月号)。
- 33) 西義章騎兵大尉「青年将校の体力及気力の増進案」『偕行社記事』574号(大正11年6月号)。こうした自己意識の深化の方向は、日露戦争前後から生まれてきた煩悶青年に通じる。キンモンスは、煩悶青年を、立身が教育の自動的な産物でなくなった際の、その代償を求める探究として出現したのではないかと述べており(Kinmonth, R. "The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought" 1981 p. 227)。竹内洋は煩悶青年をカチマケの立身出世主義のネガと見なしている(竹内 前掲書 57~59頁)。同様にこの時期の多くの若手将校の煩悶は、満たされない立身出世アスピレーションが、自己と内面の深化の方向に向けられた、と考えることができよう。
- 34) 飯塚浩二『日本の軍隊』東大協同組合出版部 1950 40~42頁参照。
- 35) 高等教育卒業者が日本の“フェシズム”を推進したというキンモンスの仮説も、大正昭和初期の立身出世市場の閉塞にその原因の一つを求めている(Kinmonth 前掲書)。

## 〔付記〕

本論文の作成にあたり、資料提供や助言など多くの方のお世話になった。とりわけ偕行社の福島角次氏、東幼会の木下秀明先生に謝意を表したい。